

立命館大学グローバル COE プログラム
日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点

日本文化を通じて世界と繋がる

「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」は人文系研究と情報系研究の融合を目指し、京都や日本文化にかかわる有形・無形文化財のデジタルアーカイブを構築してきた

21世紀 COE プログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」(2002年度～2006年度)をさらに発展させたものです。今回は、本拠点に所属されている松葉涼子さんに自身の研究活動についてお話を伺いました。



途絶えたルーツを探る

当初、21世紀COEプログラムの中のメンバーとして、画像資料を中心とした近世期の演劇資料を考証（*1）し、データベース化していく作業に携わりました。これが所謂デジタルアーカイブであり、すでに実用化された機器、ソフトウェアを駆使し、効率よくデジタルコピーを生産し、加工・整理していくところが大きな特徴となっています。データ化されたものは、あとで同じ様なものを検索するときに有効なデータとなる利点があります。

例えば番付（興行プログラム）などの上演資料を年代考証し、データベース化していくと、そのデータそのものが江戸の興行年表にもなります。さらに、自分が考証したデータを「共同利用」できるよう、外部に公開していくのも資料整理に関わる重要な点となるでしょう。

それらの活動を通して、江戸時代、歌舞伎を描いた浮世絵などの絵画資料には時期や絵師が異なっても、全く同じ構図で描かれる「典型的な図様」があることに気がつきました。場合によっては、現在の舞台上でも同じ構図を見ることができそうですが、中には忘れ去られてしまった表現もあります。画像資料の「構図」から出発して、その中身を考えるために文献資料を用いながら、失われた表現のルーツを探ることが研究の目的となります。

また、浮世絵を見たときに、絵を読むための手がかり

となる画題辞典をウェブ上で展開していくことも今後の課題として考えています。

本拠点の果たすべき役割

今までの海外連携を通じて、日本の文化は再び見直されてもいい、日本のもつ財産であり、海外の人々から早くからそれに気付いていたことがわかりました。欧米諸国だけでなく、アジアの人々も含め、文化という観点を軸に、世界と繋がっていくための新たな視点、技術や資料を共同で利用できるようなツールを構築していくことが本拠点の大きな目的の一つです。

どの分野をめざす学生のみならずにとっても、自身の「文化」への理解をもって世界と対等につきあうことが必要になる時がくるのではないのでしょうか。本拠点は立命館大学ARCを中心に活動しています。大学全体のバックアップがなければ存在しえません。様々な分野の先生方にも授業し

ベルのローカルな場から私たちの活動を広めていただき、学生自らの興味に引きつけてもらえればと思っています。

私の研究者としての役割は、古典考証を通じて、過去にあった表現の本来の意味を明らかにすることです。そこから今生きている役者が新しい表現を生み出すという連携がとれば、また新たに刻まれていく日本文化の歴史の一端を担えることになるのではないかと思っています。



(*1) 年代、人物、内容を特定していくこと

Profile 日本学術振興会特別研究員 松葉涼子(まつば りょうこ)さん

1998年4月 立命館大学文学部日本文学専攻入学
2002年4月 立命館大学文学研究科博士課程前期課程入学
2005年4月 立命館大学文学研究科博士課程後期課程入学
2007年4月 日本学術振興会特別研究員採用
2008年3月 立命館大学文学研究科博士課程後期課程単位取得退学(学位論文申請中)